

猪犬の頂点へ 新たな地平を目指して ②

田宮 治

実戦で磨く猪犬の芸域

私は「猪猟は犬次第だ」と言い続けてきた。そのことを掘り下げてみれば、一流犬群に突き当たると思う。「一流犬群による最高の猪猟」となると、その成果は犬群の使い方にかかっている。

どのような猪猟を実践するかによって、犬たちの使い方も人それぞれではあるが、ダメ犬にするのも、一流犬にするのも、すべてが犬たちをどのように使い、上手に導くかで決まってくる。

「猪猟は犬次第」と簡単に言ってみたところで、現実には仔犬作りに始まって大切に育てていき、さて、いよいよ訓練であるが、訓練は訓練所での訓練が一番良いと思っている猟人が意外と多い。

なかには訓練所で大猪に当てる

れ、一撃で負け犬にさせられて終わってしまった若犬もいるようだ。が、私はそんな相談を受けるたびに、若犬が可哀想で心が痛む。

その辺の道理は猪犬作りをやっている以上、大切な責任だと思っ述することに、ここでは猪犬仕上げの核心に突進したい。

そして、やっと仕上げた若犬であっても、さらなる犬芸を磨き、名犬にまでもっていくのには、実戦、実戦、また実戦の中で磨き叩き込むのが一番良いことである。

激戦や大一番を通して、すべての犬芸、つまり起こすのも鳴くのも、止め芸や咬み芸、そして狩り込みなどに至る芸域までも、実戦で猪を撃ち獲る実績を重ね、勝負に勝つことで覚え育ち、極めていくのである。

猪猟を志したからには、その辺

のことをよく考えて、猟法はあくまでも自分に合うように、そして犬たちは自由に狩り込ませながらも、必ず猪の獲れる結果第一主義で戦うべきである。絶対に負け犬にしないように犬群を上手に教え導くのが本物の猪犬仕上げであり、生きた訓練だと思ふ。

さらに若犬の芸を高めて維持していくためには、実戦で上手に犬たちを使い続けることである。どんなに素晴らしい犬芸に仕上がったからといって、安心して山に引かなかつたり、長期間、怪我などで実戦から離れると、犬の実力は想像以上に落ち込み、同じ犬とは思えないものである。

人間社会では一流選手であつても、何らかの理由で戦列を離れると、持ち前の実力が戻らず消えてしまつたり、戻るにしても倍旧の努力が必要になつてくる。一流選

手やプロを望むのであれば、子どもの時から一流のコーチに付けて頑張り通すことと全く同じように、犬社会でも、そんな気持ちで挑戦し続けなければならない。

私たち猪猟人が忘れてならない大切なことは、一流芸の犬を作るのは「猟人」主人の努力によるものということである。仔犬を作るのも、育てるのもすべて毎日の頑張りで成り立つことで、挑戦心を忘れないことである。

そして、既に仕上がった一流犬群であっても、いざ山で実戦に使うとなると、使い導く猟人の実力によって犬たちの繰り出す一芸はもとより、その成果や、さらなる完成度までも天と地の差になって現れてくる。こんなところが猪犬作りの難しい現実である。

私が子どもの頃、父からいつも聞かされていた「治や、仔犬を上

手に仕上げられれば、獵師も一人前や……」という教えがある。

仕上げが分からなくて思うようにならない私は、イライラして仔犬を怒っていたが、今になってやっとその辺のことがはつきり分かるようになった。なんとも有り難いことである。「親の教えと冷や酒は後になってきく」と言われるとおりで、困った時や猪猟で迷った時に思い出す。

生国の山村で子どもの頃、父や兄たちからたたき込まれた猪猟の原点は、まさに一流コーチに教えられたようなもので、今でも私の猪猟で生き続けている。

猪犬を作る時も、仕上げる時も、猪と戦う時でも、いつも思い出し、懐かしさや、その時々々の教訓を突き進む原動力にしている。狩猟を趣味として、人生の生き甲斐にしている以上、最高の猪猟を実践できるのは大切なことである。

年を重ねたその時に趣味ひとつ持たず、やることもない毎日を考えてみると、改めてせっかくなかったこの狩猟は、大事に推し進めて楽しいものとしていきたい。

何事でも同じように、物事には原点があつて基本がある。夢を追いつけて現実のものとして楽しく実践したり、きちっと推し進め頂点を極めるのであれば、原点と基本は最も大切なことであり、確実に実行、克服することである。

私は山彦会千葉支部だけでなく、一人でも多くの猪獵人がなんとか猪猟の頂点に立って、素晴らしい達成感を味わってもらいたくて、自分がやってきて一番良いことや、大切だと思っている案件をくどいほど説明してきたのは、どれ一つ欠けても実戦では勝てないからである。

まさしく、猪猟の八合目辺りの大一番であり、激戦は夢と現実の狭間の戦いなのである。努力に次ぐ努力、訓練に次ぐ訓練の積み重ねが、どんな激戦でも結果を残し、「いつでも思いどおりの戦いができる実力」になる。なんとかそのことを分かってもらいたくて、山での実戦、そして反省と理想を記述してきたのである。

机上の理論で分かりにくいところは実戦で、それでも大変だと思

う攻め方や犬群の使い方は、実際にやって見せて、覚えてもらってきた。たかが猪猟ではあるが、頂点を極め、目指すとすれば、常日頃の訓練と実戦の場で磨く以外にないのである。

そんな当たり前の事実を言っておきたいために、今日の大切な一番を中断してまで、この戦いの目指す中味を特記したのであり、前記の事項が十分に理解できるようになっていなければ、危険すぎで止め刺しの勝負には出られないのである。

どんな大一番でも、きちっと決められるのは、これらの基礎知識が絶対に必要なことであり、この英知をもって前記事項を克服し、いつでも使いこなせるようになることである。そうすれば、突き当たる猪猟の難所や重要な案件も見事に乗り越えられ、納得できる一番良い方法や、安全で楽しい最高の猪猟に繋がるのである。

私は誰でも己が信じるただ一本の道をひたすら努力し、登り続けていけば、必ずや頂点に立てると確信している。

ついにその時がきた

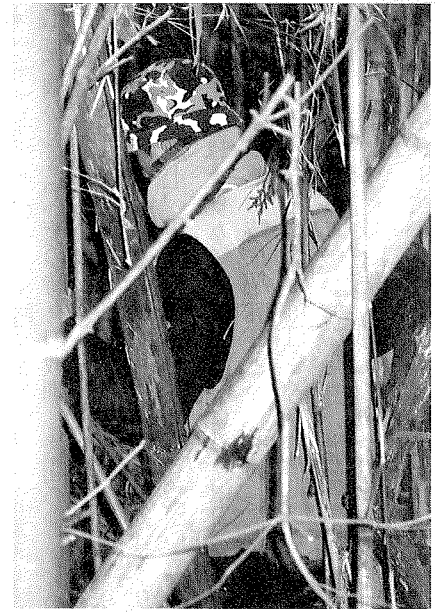
今日の一戦は私にとっても大切な戦いで、どうしても刺し技は見えてほしいと思っていた。

心の中では「必ずチャンスを作り、刺し止めてやる」と覚悟は決めていたが、そんなことは一切言わず、いつものように刺すことにごだわった。マロ号、ヨシ号、シロ号の三頭にした。

私の押し出す猪猟は、それこそ何十年も一人で考えて、思い付くまま登って来た、勝手知ったるいつもの登山道のようなものである。この辺では何があつてどんなことが起こるか、そんな時にはどのように対処するかも含め、慣れ親しんだ道程である。

あくまでも、愛犬たちとともに猪を追っかけ、失敗と成功から見つけ出した俺流の猪猟法である。絶対の自信もあるし、何度でもやってみて一番良いと思っっているものばかりである。

当たり前のことであるが、これが私の思っている一番良い、最高



千葉の猟場。止めるのは決まって竹藪の中である。犬たちの芸が良く、信じられなければ、まずもって踏み込めるものではない(加藤氏)



右…名犬の域に達したマロ号。どんな大猪でもびくともしない。一頭でき
 っちり勝てるし、私を迎えにまで来る
 上…チヒロ号の仔犬たち。いつもながら全仔犬を上手に育てる。落ちこぼ
 れなく、みな良い止め犬に成長する

の猪猟なのだが、その方法を誌上で説明するとなると、その面白さや大変さが上手に表現しきれない部分も多くあって、分かりづらくなってしまふ。しかし、いざ実践してもらおうとなると、意外と簡単だと思われるはずである。

そんなわけで、推し進めるどんな激戦や大一番であっても、私は全くの平常心である。犬たちを信じていればこそできるここぞの大

一番でも、いつものとおり、のんびりとゆっくり狩ることに徹することが、こだわりの猪猟である。

だからこそ、私が押し出し、明日に繋げたい猪猟の基本は、のんびり、ゆっくり、しかも簡単にして明瞭、面白くて、さらに安全で安心できるものでなければならぬ。これらに思っている。これらが大事にしてやってきた存念である。

今日の実戦も全くそんな気持ちに変わりはなく、北嶋氏にまかせっきりで、加藤氏もここまでくると何をしたらよいのかよく分かっている。

北嶋氏との話で、いつものタツに元気良く飛び出した。私は犬たちを車から放し、「さあ行け、頑張れよ！」と引き綱一本使わず、言葉のかけ方と手の動きで指示をする。あくまでものんびりとゆっくりだが、大切なのは犬たちの動きを見極めることであり、決して犬たちから目を離さないことだ。

そして、移り変わる山の状況の中で、猪の足跡や猪道での猪の行動を注意しながら狩り進むのである。当然のことで、訓練がきちっ



猪猟を家族で楽しんでいる北嶋ファミリー



猪犬だからといっても、シカは撃たないことにしているだけで、その気になればこのとおり。「猪だけだよ」と教えるためにじっと我慢して、主人はシカを追うことはしないから、20分くらいで戻って来る。だからシカ山でも猪をより分けて勝負できるのである（ブローニング0.6、ツァイス付き）。山梨でもエゾシカのような大ジカがいっぱいいる

とできている一流犬群であれば、ほとんど指示しなくても、どんな山でも猪臭を求め、山の上下をひっかきまぜるように見事な狩り込みをする。ゆっくり、ゆっくりとは犬たちのそんな狩り込みを見届けることである。犬たちが「ここには猪がいませんよ」というように戻って来る、「主人とのつなぎ」を待ってから先に進むのである。ここで大切なのは、犬たちを自

由に狩らせることであるが、間違っても先を急ぐあまり、犬たちを置き去りにしないことである。犬芸さえできていけば、歩きやすく、攻めに有利な大峰筋を歩いていても、犬たちは沢の下から上昇してくる気流によって、微かな猪臭でも必ず反応し、嗅ぎ分けて飛び下りて鳴き出すものである。どんな大山でも全く同じで、狩る道は七合目より上の猪道に乗っ

て攻めるのが、いざという時は飛び下りるだけなので、とても有利である。猪はどの山でも、寝ているのはひと目で分かる決まった所であり、よほど攻め立てない限り一週間もすれば、また戻り寝ているものである。猪の習性を知り尽くすのも成果に繋げる大切なことである。私は猟期初めから、この一戦を待ちわびていた。

「いなかったねえ……」
「この先には必ずいるよ」
二人で立ち止まり、ドリンクを飲みながら作戦を話している所は、出峰のどん詰まりにある少し高くなっている小峰の前である。「まだ行きますか？」と言う北嶋氏の不安を元気に変える最後のチャンスなので、気持ちを入れ、「どん詰りまでだよ」と、最後まで決して諦めないことを論ず。私はあんなに注意して猪跡を見て犬たちを入れ、狩り落としのないよう限なく攻めてきたのである。
しかし、ここまでは猪がいなかった。犬たちもよく狩り込んでいたし、猪臭はあったのだから、猪は必ずこの先に潜んでいると確信していたので、「北嶋さん、先に進んでください」と告げていた。
北嶋氏は元気良く小峰の小高い所に向かっている。その先で、マロ号とシロ号が猪臭を取ったように、急に小高い峰を右横に回るように姿を消した。ヨシ号はなんと私たちがいたすぐ下に続く急な小峰を飛び下りて行った。
「出るな……」

そこは猪がいるとは全く考えられないすぐ下の谷底が見える所で、あっといふ間の出来事である。

「ワン、ワン、ワン」

ヨシ号の見事な寄せ鳴きであるが、この猪はどうもマロ号とシロ号が回り込んだ小峰から飛び出し、ヨシ号の前に逃げて来たようだ。ヨシ号は、その猪に居竦めをかけて止めて、マロ号たちや私に知らせているのだ。この犬芸は知る人ぞ知る、猪止め犬の最高芸である。

既に早立ちした追われ慣れた猪など、並の犬に止められるものではない。ヨシ号の声は二、三分くらいと思うが、静かな谷間に響きわたる素晴らしいものである。私はまだ姿の見える北嶋氏に「出たぞ！」と怒鳴っていた。すぐ駆け寄って来た北嶋氏に「この猪は止まらない。必ず、この谷を横に走り、私が大猪を撃ち逃がした一本先のおそこに行く。その先を横に回って早くあの場に立ってもらいたい」

北嶋氏は「分かった」と言うのと、出峰を横に突っ走って行った。私

はシーバーを握り、ただ一人タツで頑張っている加藤氏に猪が出たことと、この猪が北嶋氏に気づきタツを抜ければ必ず加藤氏のタツに行くことを告げる。

「これでよい。さてどうしたものか……」

様子を見てみると、追って来たマロ号とシロ号が猪に寄り付いたようで、三頭の凄じ威嚇が始まった。

「よし、よし、その調子だ。咬み止めるよ」とつぶやき、期待して飛び下りるタイミングを計っていると、突然猪が走り出した。急な小峰を下に向かってバリ、バリ、ギャン、ギャンの谷落としのようだが、どうもいつもの鳴きではない。次の瞬間、なんと猪は谷底に落とされずに崖の急な中段を横に突っ走り、北嶋氏を追うように向こう側の崖をどんどん登っている。このまま行けば、北嶋氏の移動タツにはまる。

「よし、これでよい」と、思案しながら犬群の追い鳴きを聞いてみると、透けて見える山肌に、赤い物体が矢のように飛んだ。マロ号

が勝負に出たのだ。ヨシ号とシロ号は見えないが、マロ号は追い鳴きの少し上から猪に飛びついたようだ。追い鳴きが突然、下に向かった絡み鳴きに変わり、ワン、ワン、ギャン、ギャンのいつもの見事な谷落としになった。

「待ってました」とばかりにヨシ号が鳴き出し、小峰伝いに谷底に飛び下りて行った。

必死で登り逃げる猪に、ギャン、ギャンと咬みを入れて追いつけるヨシ号とシロ号の先回りをし、マロ号が上から攻撃し、谷底に押し戻して来る辺りに下り立つべく必死であった。

危険すぎる崖でまごまごしていると、すぐ下にダンゴになって落ちて来た猪は、さすが追われ慣れた兵^{つわもの}らしく、どんどん谷を下り、三〇〇メートル先には広がる田んぼを目掛けて逃がれている。

「しまった。もう少し早く谷底に下り立ってれば、どんびしゃのタイミングだったのに……」

すぐその先は県道である。幸いなことに、そこは田んぼだけで民家は無い。谷底を走りながら、や

っぱりこの猪は追われ慣れた七〇〜八〇*くらいの一、番止めづらいう荒猪であるが、マロ号たちの執拗な攻めに押しまくられ、逃げ場を失い田んぼに飛び出したのだ。

しかし、この猪はこの山裾を回って次の沢に飛んで行くかもしれない。その沢の抜け道には北嶋氏が頑張っているはずである。

相変わらず犬たちは、接近戦の絡み鳴きである。やつのことでは薄暗い杉林の中からパッと開けた田んぼの水口に出た。目下に広がる棚田の中ほどでワン、ワン、ギャン、ギャンやっているが、鳴き声だけで、どこにも犬たちの姿は見えず、県道を車が走っている。

「おかしいなあ、どこからだろう」

田んぼの畦を何本も走り、行つては戻り、聞き耳を立てる。

しかし、猪の反撃音は全く聞かれない。確かに止め切つて咬み込んでいる時の鳴き声である。あの咬みついたままで鳴く、ガォツ、ガォツという鳴きが入っているのだから、必ず咬み止め、振じ伏せているはずなのに、どこを見ても

田んぼばかりである。

道路が気になって仕方ないが、鳴き声は近くなので、思いきって大声でいつもの「ジジが来たぞ、頑張れ！」と怒鳴ると、犬たちの鳴き声だけは急に大きくなったが、姿は相変わらず見えない。

仲間に声をかけるように「どこだ。マロ、シロ……」と呼ぶと、白い体が一〇〇呎くらい下の土手下から一瞬飛び出し、私を確認すると、また姿を消した。

「シロ！ そこにいたのか」と田んぼの中を一直線に走り、シロ号たちの上に立った。なんとそこは腰まですっぽり入るほどの掘り抜き水路だった。稲の刈り取りが終わった後なので、水がほとんどない水路の中に猪もろとも押し入っての、どろまみれの激戦だったのである。

泥まみれで採み合っていて、猪が大きく口を開き、咬みつこうとしている。「よし、よし！ もう大丈夫だ。よし、よし！」と声をかけ励ましたものの、やりようがなく、一瞬考え込んだ。

だが折り重なっての、この状況

では、すぐやらなければ必ず猪に咬まれる待ったなしの状態であり、おまけに県道もすぐ近い。

とっさに銃に安全をかけ、そばに置き、腰のナイフを抜き、溝の縁に両膝をつき、犬たちを交わして右手をいっばいに伸ばし、猪の前足の横から持ち上げるように強くひと刺しした。

耳が破れそうな犬たちの鳴き声も、猪のグウグウ音も、猪が動かなくなるにつれ、ゆっくりと消え去り、元の静けさを取り戻していた。「よし、よし、よくやった、終わりだよ」

犬たちを猪から引き離し、一頭ずつ綱を付け、土手にある梅の木に繋ぎホツとする。そして土手にどっかり座ると、「取れますか、どうぞ！」と二人の元気な声はね返って来た。「終わりましたよ」と言うのと、銃の音もしないのにと思

ったらしく、「どうなりましたか」と不思議そうに言うので、「刺し獲りました」と告げた。

県道のすぐそばなので、加藤氏には車に戻してもらい、忘れ物のないように注意して来るように、

北嶋氏にはそのまま下りて来るように告げる。そして泥だらけの犬たちをタオルで拭きながら、一頭ごとに「よし、よし、よくやった」と声をかけ、全身を点検するが、どの子も全くの無傷である。

あれほどの激戦の中で、こんなに見事な見せ場を作ってくれ、念願の刺し止めも容易にできた。私はや々と安堵し、「お前たちよく頑張ったなあ。よし、よし」と大声で呼びかけ、こんな時のためにいつも持っているコップパン（ジヤムとクリーム入り）を半分にして犬たちにやった。そしてまた全身を撫で回し、泥だらけになって褒めちぎった。

「すこかったぞ！ よし、よし」の連発に犬たちも嬉しそうにクンクンと鳴き、目いっぱい尻尾を振ってすぐ下に残る猪に向かってワンワンと鳴き、また行こうと元氣まる出しである。

猪犬にはこんな時に褒めてやる気を出させるのが一番良い方法で、シロ号のように訓練中の若犬でも、ヨシ号やマロ号のような一流犬であっても、こんな激戦を全

力を出し勝ち抜くことで、すごい犬芸を学び取るのである。

そして主人に褒めちぎられることによって、犬たちは「猪を倒せば主人が喜ぶ」ということを知り、さらなる頑張りや、犬芸の成長、進化に繋がるのである。

猪獵人であっても全く同じで、頂点付近の激戦では、英知を集め、全力を尽くし必ず勝つことが重要である。

勝利の体験を重ね、喜び続けるその先に、名人や名犬が出来上がるのである。押し並べて断言できることは、獵人が努力して掴み取った最高技術に磨き抜いた最高の犬芸が融和したその時に、夢の頂点だって現実の物となって堂々と立てるのである。

私はそう信じて、今日の一戦を全力で戦い、その戦いぶりをしっかり見てもらい、その大切さを分かかってほしかったのである。

刺し止めの犬技などは、さあやりますよ、と試してみたいところで簡単にできるものではない。この技は前述のように、必ず覚えて、いつでも使いこなせるのが大事で

あり、安全、安心の猪猟に欠かせない。

だから私は大技と位置づけ、特別メニューで取り入れ、頑張ってきたのである。

ただ大技といっても、きちっと覚えれば、刺し止める技そのものは、誰もがすぐできるものであるが、そのことよりもはるかに難しいのが、「刺し止める現場をきちっと作る」その戦いぶりである。

つまり、銃が使えなくて、猪を刺す以外ないといった、そんな場面は猟人の技術と犬たちの芸がよほどできていなければ、そう簡単に作れるものではない、という意味である。

振り返れば正月以来、この一戦を念願し頑張ってきたのであるが、逃げ慣れた猪を攻めあぐね、一時どうなることかとやきもきしたが、犬たちは終止一貫してこの荒猪をリード、追いまくり、咬みつき、ついに溝の中に嵌め込んでいつもの攻撃で猪を刺し獲る以外ない、絶好のチャンスを作ってくれたのだ。

嬉しくて有り難くて、犬たちに

感謝しながら、それこそ思っていた念願どおりの見事な刺し止めを敢行できたのである。

ただ残念だったのは、この刺し止めを二人に見せてやれなかったことである。この一戦の戦いぶりとは、いざという瞬間の対処を目前で実行できれば、「さあ刺してみろ！」と、二人に刺させることが目的であった。それでも実戦の戦いぶりは既に十分やっていたので、刺し止め現場を見れば、その内容も分かっていただけはずである。

幸いなことに、十二月頃、小物ではあったが、マロ号とシロ号、ヨシ号の同じ犬たちで猪をU字溝に嵌め込んだ。この時はシロ号の訓練のため、私は撃てないこともあったが（コンクリートで跳弾の恐れがあり）、二〇日くらい離れた所から写真を撮りながら犬たちの戦いぶりを見守っていた。

若犬は実戦でこんなチャンスがきたら、じっと咬み倒すまで見届けることが大切で、咬み芸を何倍も上達させる良い方法である。

ただし、二〇日以内に近寄らな

いことと、荒猪は別である。二〇日以内に近寄ると、犬たちが安心して咬むのをやめ、猪に逃げられる場合がある。荒猪は当然のことながら危険なので、すぐやるのが基本である。

安心して見ていられる良いチャンスなので、この戦いでは無線で連絡し、加藤氏と北嶋氏に來てもらい、その辺のことをよく説明し、「このような状況下では刺さねばならない」ことを分かっていたのだいたうえで、北嶋氏に刺し獲ってもらっている。

しかしながら、今日の一戦は全然中味が異なる。この現場は県道から五〜六日くらいの所で、戦っているのは身動きもままならない深い溝中である。折り重なって乱闘している犬たちが、いつ荒猪に咬まれるか分からない、まさに一瞬を争う大事である。

犬たちは戦い慣れているものの、猪だって荒猪である。猪は大きいのが強いわけではない。実際に戦ってみて分かるのは、八〇〜一〇〇日くらいの追われ慣れた猪

が一番攻撃も素早く、逃走術に長

けているので、きっちり止めきるのが難しいものなのである。

そんな中で、二人には後で見分かってもらえる写真も撮れたのだから、これが私にできる「最高の夢舞台」であったと思っっている。

そんなことを考え、犬たちと話し三十分くらい経っただろうか。一台の軽トラックが止まった。北嶋氏かと思ったら、降りて來たのは地元の猟師で、平野さんの知人であった。こんな道の近くまで追い込み、刺し止めたことにびっくりしたようで、犬たちを盛んに褒めて帰って行った。

ちょうど入れ替わりに、姪のジープで加藤氏が来てくれた。私が土手に座り犬たちと話していて、猪が見当たらないので、「猪はどこに?……」と聞いてきた。「すぐ前の溝の中だよ」と答えると、その猪をすぐ引き上げにとりかかってくれた。

この辺が彼の良いところで、いつも真っ先に立ち、猪の引き出しや、実戦での仕事をこなして私を助けてくれている。

猪がどっぷり泥に埋まっている

ので、こんな小物と思つたらしいが、「これは重い。とてもダメだ」と言うので、ニヤニヤしながら私も立ち上がり、二人でやっと引き上げ、道端にドーンと横付けした。

ここまで猪を引き出すのに、いつもは大変な重労働で、何時間も掛かっていたが、今日は引き上げて少し引きずった所がすぐ猪を車に積める道端である。

加藤氏に聞かれるままに「あの出峰で起こし、あの小沢を上を飛び、貴方たちの方向に行こうとしたが、マロ号に先回りされて押し戻された。小沢伝いにある水口から田んぼを走り、ここで止めてくれたが、ご覧のとおり犬たちもろとも溝の中なので、捜し出すのに苦労した。私の呼び声でシロ号が顔を出したので、駆けつけたのだが、この中で泥まみれの一時を争う激戦で、犬たちが心配になったのですぐに刺したのだよ」と事の顛末を説明し、待つてやれなかつたことをお詫びした。

今回の戦いで、特に心配だったのがシロ号であった。若くて向こう見ずのシロ号は、追いまくり、

咬みまくっていたが、猪は白い物に敏感に反応するものである。

こんな何もない田んぼなどでの戦いは、訓練所の戦いと同じように、黒や茶色より白い物を強力に突いてくるものである。白い犬を使つた時や、白い着物を付けた時は要注意である。

そんなことを話しながらまた写真を撮ってもらい、北嶋氏の来るのを待っていた。

「遅いなあ、あそこからならもうとっくに来るはずなのに……」
そこに外車（フォード）が止まり、中から子どもたちがガヤガヤ叫びながら降りて来た。私たちがびっくりしていると、その後ろから北嶋氏の奥さんが笑顔で近づいて来た。

「奥さん、どうして……？」と聞くと、「主人から知らされ、道のそばなら良い機会だと思つたので子どもたちと楽しみにして来ました」とニコニコしている。「猪だ、猪だ！」と盛んに喜んでいる子どもたちに、「この溝の中でシロ号とヨシ号、マロ号が泥んこで戦つたのだよ。そして、ジジがこうして

刺して獲つたんだ」と話してやる。

子どもたちはみんな犬が好きで、マロ号たちとも顔なじみで、私が犬たちに食餌を与えているとバケツで水を運んできてくれたり、猪の解体時には足を押さえてくれたり、よく手伝ってくれる。

すべて北嶋氏が猟に懸ける気持ちを子どもたちに伝えていく結果だと思ふが、奥さんをはじめ子どもたちにその気持ちがよく届いている。

ここでも残念だが、またとないこんな良いチャンスに奥さんや子どもたちの笑顔が撮れないことである。フィルムがなくなつてしまったからで、残したかった写真がないのは、この記事を書いている今でも惜しいことをしたと思つている。

やっと、どんじりに北嶋氏がやって来たが、彼は大峰を戻り車を持って、家に帰る準備をしてからここに来たようである。それでも、今日の戦いは一番よく知り苦労も分かつていただけに、しみじみと猪の獲れたことを喜び、犬たちに感謝していた。

またひと回り大きく成長した二人を見て、願わくばこの一戦を契機に頂点まで一気に突っ走ってもらいたいものである。

なんととっても、二人は若い。それになによりも、理解してくれる素晴らしい大切な仲間と家族がいる。こんなに良い環境の中で、この先は自分ができる最高の技を一戦一戦にしっかりとぶつけて頑張っていくことである。

一人ひとりが持てる力を出し切ることで、猪猟の難所や訓練を実感し、勝ち抜く一番良い方法をきっちりとし身につけることである。そんな考え方や技術力を持った獵人が、組み合わせられた時、素晴らしいグループが生まれるのである。名実共に一流で楽しめる、本物の猪猟道にたどり着くと思うのである。

まずは自身の技を磨くこと、鍛え抜くこと、そして食欲に頑張り続けること以外になさそうである。その先のことは、この先の話である。

次回は「ガチンコ勝負」を書きたいと思ひます。(つづく)